

平成26年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成26年11月～平成27年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を下回り、平年並み。
- (5) ウルメイワシは前年並みで、平年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年並みで、平年を上回る。

※「前年」は平成25年11月～平成26年3月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当：沿岸資源班 梶脇、影沼澤

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

担当：前野、岡

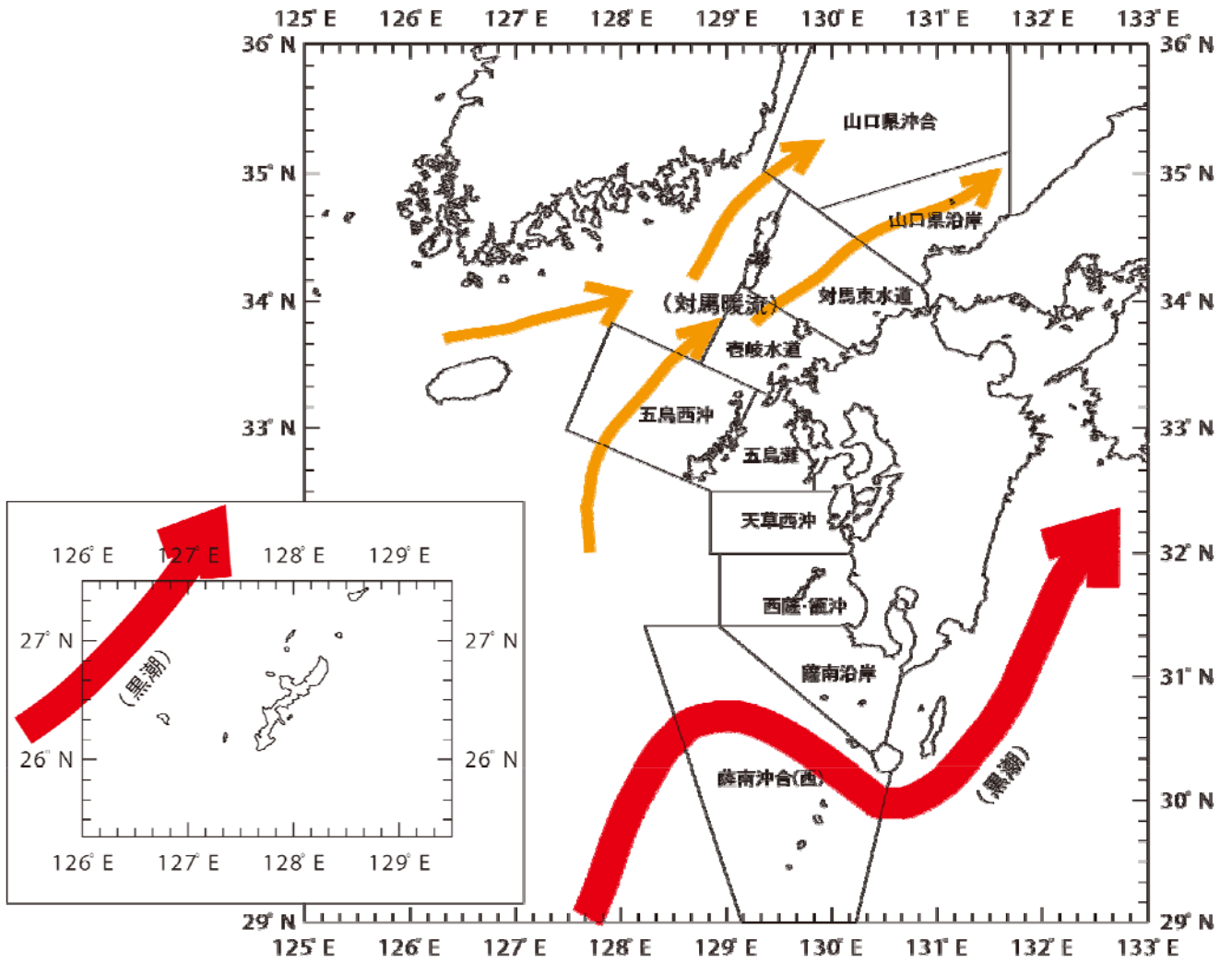
電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2014年11月～2015年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸・沖合、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮域で「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2014年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「かなり低め」、8月「やや低め」、9月「平年並み」。

南部：4・5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月「平年並み」、9月「はなはだ高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、5月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

4・5月「やや低め」、6～8月「平年並み」、9月「はなはだ高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4～6月「平年並み」、7月「はなはだ高め」、8～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや高め」、5・6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、9月「やや低め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや高め」、5～7月「平年並み」、8・9月「やや低め」、10月「平年並み」。

壱岐水道：4・6月「やや高め」、8月「やや低め」。

五島西沖：4月「平年並み」、6月「やや高め」。

五島灘：4月「平年並み」、6月「やや高め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4～6・8・10月「平年並み」。

西薩・甑沖：4・5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4・5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「かなり低め」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東：5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「はなはだ高め」、8月「平年並み」、10月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4・5月「やや低め」、6月「平年並み」、7～9月「やや高め」、10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「やや低め」、5月「平年並み」、6月「やや高め」、7～10月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや低め」、5～10月「平年並み」。

壱岐水道：4・6月「平年並み」、8月「やや高め」。

五島西沖：4月「平年並み」、6月「かなり低め」。

五島灘：4月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」。

天草西沖：4月「平年並み」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」、10月「平年並み」。

西薩・甑沖：4月「平年並み」、5・8月「やや高め」。

薩南沿岸：4・5・8月「平年並み」。

薩南沖合 : 4・5・8月「平年並み」。

沖縄島南東 : 5月「やや高め」、6～8・10月「平年並み」。

3. 現況 (2014年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「平年並み」、南部「かなり高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸傾向」。海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2014年11月～2015年3月）

対象海域：東シナ海～日本海西南海域

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2014年級群（2014年生まれ））、1歳魚（2013年級群）、2歳魚（2012年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を上回り、平年並み。

(3) 魚体：10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を上回り、平年を下回る。

(3) 魚体：25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量：前年並み。

(2) 漁期・漁場：沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年並みで、平年を下回る。

(3) 魚体：沖合域では25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に獲される。沿岸域では32～38cmの2歳魚以上（中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量：前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：14～17cmの0歳魚（中羽銘柄）主体に、18～22cmの1歳魚以上（大羽銘柄）も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～20cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体：10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主体で、5cm程度の0歳魚（カエリ・小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2013年11月～2014年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2014年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999～2002年には30万～40万トンだったが、2003、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で経過している。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2005年以降は減少して13万トン前後で推移し、2013年は12万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量により、資源量は2008年に増加したが、2009年には再び減少した。その後は2012年まで資源量は横ばい傾向を示していたが、2013年に急減して43万トンと推定され、1973年以降で最低値となった。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年に41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は9万トン前後で推移していた。2007年は10万6千トン、2008年は12万1千トン、2009年は13万1千トンと、2007～2009年にかけて緩やかな増加傾向を示したが、その後は2010年に11万8千トン、2011年には11万1千トン、2012年には10万8千トンと緩やかに減少した。2013年には6万4千トンに急減し、1973年以降で最も低い値となった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2013年に比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。2000年以降では、2004年の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示した。その後、資源量は2008年にかけて減少傾向を示したが、2009年以降は緩やかな増加傾向を示し、2013年の資源量は13万4千トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に最高の8万8千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は3万1千トンであった。2005年には7万6千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2010年は3万トンとかなり低い値を示した。2011年は2010年より増加し4万9千トンであったが、2012年は4万7千トン、2013年は3万8千トンに減少した。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。近年では、高い加入量のため、資源量は2010年以降急増している。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は漁獲量が増加傾向にあり、

2012年には3万4千トン、2013年には8万6千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。近年では、1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあったが、2003年以降は増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加に転じ、2012年の漁獲量は3万6千トン、2013年の漁獲量は5万トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1998～2000年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。その後、2004年まで減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008年以降に減少傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年には12万トン以上となった。その後、漁獲量が一旦下がったものの、再び増加し、2008年には9万7千トンとなった。しかし、2009年以降は減少傾向にあり、2013年の漁獲量は4万8千トンだった。

2. 漁況の経過

2014年4月～8月の大中型まき網漁業の主な漁場は、対馬沖、東シナ海中部および東シナ海南部であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計3万6千トンで前年(2013年4月～8月、4万7千トン)を下回った。マアジは1万5千トンで前年(2万2千トン)を下回り、さば類は1万2千トンで前年(1万3千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、前年・平年並みであった。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年を上回り、平年を下回った。漁獲の主体は27～33cmの1歳魚であった。ゴマサバは、前年を上回り、平年並みであった。漁獲の主体は32～38cmの2歳魚以上と27cm以下の0歳魚であった。マイワシは、前年を下回り、平年並みであった。4・5月の漁獲量は少なかったため、漁獲の主体は6月～8月に漁獲された8～16cmの0歳魚であった。ウルメイワシは、前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は4月～8月まで15～25cmの1・2歳魚であり、5月から3cm以上の0歳魚が混じた。カタクチイワシは、前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は4月が8～11cmの1歳魚で、5月～8月は3～12cmの0・1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2012年級群は2011年級群と同程度、2013年級群は2012年級群を上回る豊度と考えられる。2014年級群の評価は難しいが、2013年級群を下回る豊度と考えられる。これらから、0歳魚(2014年級群)は前年を下回り、1歳魚(2013年級群)は前年を上回り、2歳魚(2012年級群)は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当たり漁獲量)(参考図参照)は、2009年から2011年にかけて増加したが、2012年に減少し、2013年も2012年と同水準だった。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2010年以降増加した後、2012年は減少して、2013年は再び増加した(参考図参照)。来遊量は

前年並みであるが、直近までの漁況から、沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年を上回り、平年並みと考えられる。

(2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。2012年級群の豊度は2011年級群より低く、2013年級群の豊度は2012年級群より低いとみられる。2014年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2013年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0歳魚(2014年級群)は前年並み、1歳魚(2013年級群)は前年を下回り、2歳魚(2012年級群)は前年を下回り、来遊群の主体となる0歳魚の豊度が前年並みであることから、全体の来遊量は低調であった前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年を上回り、平年を下回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では1月～3月期には2歳魚以上(中銘柄以上)も漁獲される。2012年級群の豊度は2011年級群と同程度、2013年級群の豊度は2012年級群より高いとみられる。2014年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2013年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0歳魚(2014年級群)は前年並み、1歳魚(2013年級群)は前年を上回り、2歳魚(2012年級群)は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年並みで、平年を下回ると考えられる。

(4) マイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚(中羽銘柄)が主体に、1歳魚以上(大羽銘柄)も漁獲される。これまでの漁況の経過より、2014年級群の評価は難しいが、2013年級群の豊度を下回るとみられる。2013年級群の豊度は2012年級群を上回るとみられる。以上より、全体の来遊量は前年を下回り、平年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。2014年級群の予測は難しいが、各県の4月～8月期の漁況および前年11月～3月期の漁況から、2014年級群の豊度は2013年級群と同程度とみられる。2013年級群の豊度は2012年級群より高いとみられる。全体として来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚秋季発生群(小羽銘柄)と、0歳魚春季発生群(大羽銘柄)および1歳魚(大羽銘柄)が漁獲の主体となる。これまでの漁況の経過より、春季発生群でみると2014年級群の豊度は2013年級群と同程度と考えられる。秋季発生群の2014年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2013年級群と同程度と考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年並みで平年を上回ると考えられる。

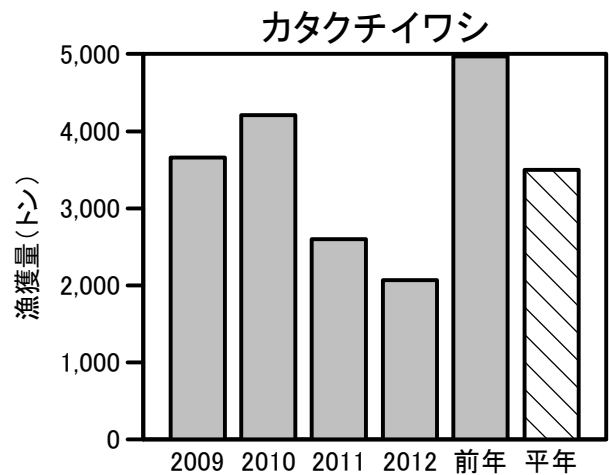
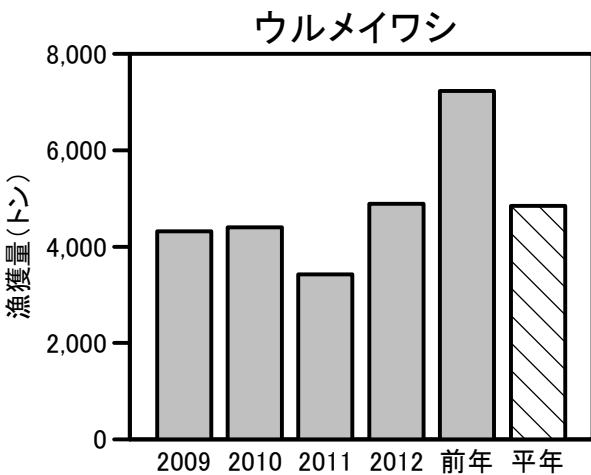
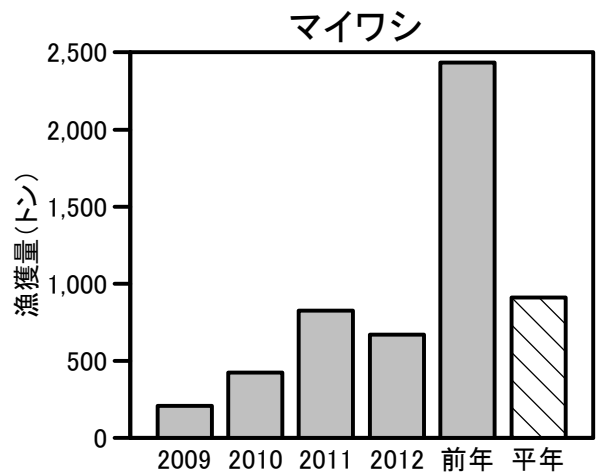
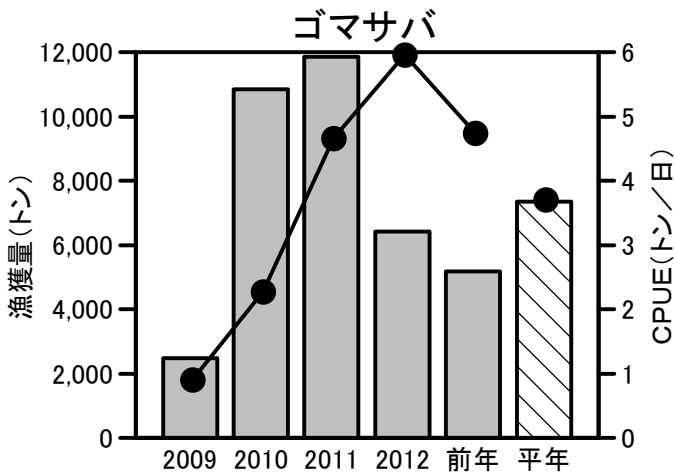
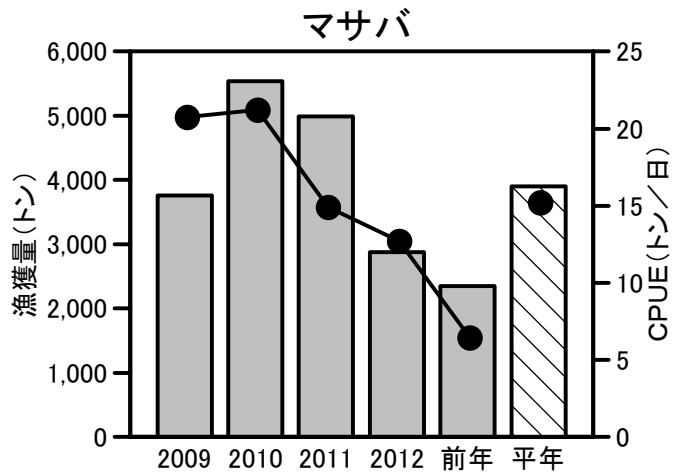
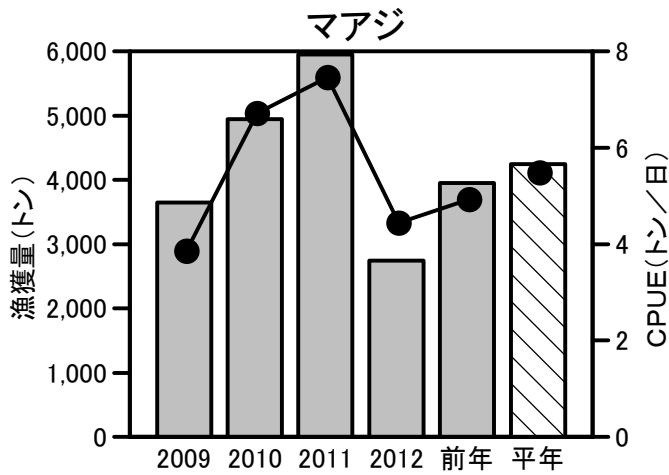
表1. 沿岸域の漁況経過（2014年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網漁業の水揚量は、787トンで前年並みで平年を下回った（前年比94%、平年比58%）。	中型まき網漁業の水揚量は、68トンで前年・平年を下回った（前年比60%、平年比14%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は522トンで、前年を上回り平年並みであった（前年比135%、平年比101%）。漁獲のうち59%をゼンゴ銘柄が占め、前年比178%、平年比114%であった。棒受網の漁獲量は17kgでほとんど漁獲されず、不漁であった。小型定置網の漁獲量は18トンで、前年比250%、平年比170%と好漁であった。	代表港中型まき網漁獲量は74トンで、前年を上回り平年を下回った（前年比171%、平年比25%）。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は4トンで、前年を上回り平年を下回った（前年比170%、平年比70%）。
佐賀	前年を下回り平年並みであった（前年比77%、平年比97%）。	前年を上回り平年を下回った（前年比183%、平年比35%）。	
長崎	地域により差があるが、前年・平年並みであった（前年比106%、平年比108%）。	前年並みで平年を下回った（前年比105%、平年比38%）。	
熊本 牛深港	水揚量は216トンで前年（14トン）・平年（74トン）を上回った（前年比1554%、平年比291%）。	水揚量は362トンで前年（137トン）・平年（225トン）を上回った（前年比264%、平年比161%）。	
鹿児島	主要4港のまき網では、6月以降、アジ仔・豆アジ（2014年級群）主体の好漁が見られた。期間中合計で723トンの水揚げで、前年（302トン）を大きく上回り平年（809トン）並みであった（前年比239%、平年比89%）。		主要4港のまき網では、4・5月はゴマサバ中・中小（2011年級群、2012年級群）主体に、前年・平年を上回ったが、6月以降はやや低調となった。期間中合計8104トンの水揚げで、前年（6405トン）をやや上回り、平年（7329トン）並みとなった（前年比127%、平年比111%）。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網漁業の水揚量は、1トンで前年・平年を下回った（前年比48%、平年比48%）。湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、3トンで前年・平年を下回った（前年比50%、平年比10%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、97トンで前年・平年を上回った（前年は漁獲なし、平年比128%）。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、小中羽主体に448トンで前年を上回り平年を下回った（前年比122%、平年比52%）。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は48トンで前年並みで平年を上回った（前年比103%、平年比158%）。棒受網では漁獲されなかった。	代表港中型まき網漁獲量は108トンで前年・平年を上回った（前年比210%、平年比162%）。棒受網では漁獲されなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は6トンで前年・平年を下回った（前年比13%、平年比12%）。
佐賀	前年・平年を上回った（前年は漁獲なし、平年比353%）	前年を上回り平年並みだった（前年は漁獲なし、平年比110%）。	前年並みで平年を下回った（前年比80%、平年比55%）。
長崎	前年・平年を下回った（前年比31%、平年比7%）。	地域により差があるが、前年並みで平年を上回った（前年比111%、平年比142%）。	地域により差があるが、前年・平年を上回った（前年比137%、平年比131%）。
熊本 牛深港	水揚量は116トンで前年（1580トン）・平年（663トン）を下回った（前年比7%、平年比18%）。	水揚量は1186トンで前年（1461トン）並みで平年（785トン）を上回った（前年比81%、平年比151%）。	水揚量は2505トンで前年（2176トン）並みで平年（1782トン）を上回った（前年比115%、平年比141%）。
鹿児島	主要4港のまき網では、6月以降、小羽（2014年級群）主体で、北薩海域の甑島周辺、長島、薩南海域の野間池、佐多沖、内之浦沖でまとまって漁獲された。期間合計で2345トンの水揚げで、前年（3551トン）を下回り平年（1207トン）を上回った（前年比66%、平年比194%）。北薩海域の棒受網では、期間合計114トンの水揚げで、前年（569トン）・平年（221トン）を下回った（前年比20%、平年比52%）。	主要4港のまき網では、6月以降、小羽（2014年級群）主体で、北薩海域の甑島周辺、長島、薩南海域の野間池、佐多沖、内之浦沖でまとまって漁獲された。期間合計で3365トンの水揚げで、前年（4697トン）を下回り平年（2331トン）を上回った（前年比72%、平年比144%）。北薩海域の棒受網では、期間合計で838トンの水揚げで、前年（931トン）・平年（974トン）並みであった（前年比90%、平年比86%）。	主要4港のまき網では、中・大羽主体（2013年級群）に、期間中合計で2265トンの水揚げで、前年（2933トン）を下回り平年（1237トン）を上回った（前年比77%、平年比183%）。北薩海域の棒受網では、中羽主体（2013、2014年級群）に期間中合計で467トンの水揚げで、前年（944トン）を下回り平年（541トン）並みであった（前年比50%、平年比86%）。

注：「前年」は2013年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋技術センター
福岡県水産海洋技術センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	